

2022年3月13日（日）受難節第2主日

銀座教会 主日礼拝（家庭礼拝）

礼拝招詞 「わたしたちの贖い主」 これは永遠の昔からあなたの御名です」

イザヤ書 63章 16節 b

主の祈り

交読詩編 詩編 31編 8～11節

慈しみをいただいて、わたしは喜び躍ります。
あなたはわたしの苦しみを御覧になり
わたしの魂の悩みを知ってくださいました。
わたしを敵の手に渡すことなく
わたしの足を広い所に立たせてくださいました。
主よ、憐れんでください わたしは苦しんでいます。
目も、魂も、はらわたも 苦悩のゆえに衰えていきます。
命は嘆きのうちに
年月は呻きのうちに尽きていきます。
罪のゆえに力はうせ 骨は衰えていきます。

使徒信条

讚美歌 261番 みやこのそとなる

聖書 マルコによる福音書 14章 53～65節

14:53 人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。54 ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。56 多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。57 すると、数人の者が立ち上がり、イエスに不利な偽証をした。58 「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」59 しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。60 そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」61 しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。62 イエスは言われた。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」63 大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。64 諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。65 それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみる」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

牧会祈祷

天の父なる神さま。主イエス・キリストの十字架の御救いを覚え、この受難節の時

を過ごしております。主の十字架の御跡を覚えつつ、1日1日を過ごすものとならせてください。恵みによって、今日も一つの御言葉をいただく礼拝の時が与えられ感謝いたします。新しく春の始まりに向け、教会の歩みを祝福してください。総会、役員選挙、新たにお迎えする先生方、すべて仕えるおひとり一人の上に主の祝福とお導きをお与えください。世界の平和を祈ります。苦難の中にある方々を守り、キリストの平和と義によってお守りください。新しく始まる週も、主を愛し、隣人を愛するあなたの僕としてお仕えできますように。キリストの御名によって祈ります。アーメン

説教 「偽証にまさる証し」

副牧師 藤田 由香里

主イエスの御受難を覚える受難節第二主日をお迎えしました。大変緊迫した最高法院の主イエスの裁判の場面です。祭司長・長老・律法学者たちは、主イエスの公のご生涯において、繰り返し、主を試そうとしてきました。

マルコによる福音書7章で、イエスはすでにファリサイ派の人の偽善を見抜いて、神ではなく人間を中心としていることを指摘されていました。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。「この民は、口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしくわたしをあがめている。」あなたたちは、神の掟を捨てて、人間の言い伝えを守っている」（マルコによる福音書7章6～7節）鋭い悔い改めを求めるお言葉を語られておりました。

そして、彼らは、多くの人々が主イエスのお言葉を信じて弟子になる様子を見て、妬みと怒りから主イエスを陥れる心の種を膨らませておりました。12人の1人イスカリオテのユダは、ヨハネ福音書においては「サタンが入った」（13章27節）と言われますが、主の晩餐を共に囲んでいる間も、主イエスを引き渡す計画の時を待っていたのであります。それは主イエスをご存知の計画でありましたが、ユダは裏切りの接吻により、主イエスを捕らえました。すると、11人の使徒と他の弟子たちは皆、「イエスを見捨てて逃げてしま」（マルコによる福音書14章50節）いました。またマルコ福音書記者本人ではないかと言われる「1人の若者」（マルコによる福音書14章51節）も主の御前から逃げ出したことを記録・告白しています。この後、ペトロが1人、遠く離れながらイエスの後に従います。

主イエスは、引き渡され、ユダヤ教の最高法院サンヘドリンへと連れて来られました。祭司長、長老、律法学者らは皆、イエスを死に渡すための証言を求めていました。

本日の場面では、「証言」「証し」が一つの鍵になる言葉であると思います。「証言 マルトゥリア」という言葉が、派生語を含め7回出てきます。その派生語には「偽証する プシュードマルトゥレオー」という言葉があります。「偽証」これは、文字どおり、偽りの証言です。真実とは異なる言葉を、証しとして公に語る。今日の世界にあっても、わたしたちは、偽証であろうと思える言葉を、たやすく見つけることができます。しかし、偽りであるが故に、そのような言葉は、いわば集められると「バラバラ」であって「一致する事はなく」（マルコ14章59節「食い違ふ」の直

訳)、どこかにそのほつれが露呈されます。本日のサンヘドリン・ユダヤ教の最高意思決定機関の最高法院の場でなされた裁判は、まさにそのような証しが錯綜する場でありました。そこに、静かに、落ち着いて、冷静に立っておられるのが主イエスです。そして主イエスはこの出来事自体が、父なる神の救いのご計画であることをよくご存知でありました。

主イエスに対する不利な証言が求められ、一同が死刑にするために躍起になるなか、ここに、一つの具体的な証言が記されます。「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」(マルコによる福音書14章58節)

マルコによる福音書13章2節に主イエスが語られた言葉をこの男は証言しようとし、しかし、彼はイエス様が言っていないことも言っています。主イエスは「わたしが神殿を打ち倒す」とは一言も言っておりません。イエス様が語る言葉は、ご自分の力で壊したり立てたりするという言葉ではなく、<Divine Passive 神の受動>と言われる、父なる神がそれを成し遂げられるが故の受け身表現を用いています。「一つの石もここで崩されずに、他の石の上に残らされることはない」(同13章2節)と言っています。どこまでも、父の御心に沿って歩まれる御子は、神殿が倒されるのも、建てあげられることも、神の御意志として語られます。この言葉が本当に示している事は、キリストの体が一度十字架で死に渡されても、3日後に復活なさるということでした。復活をなさるのも父なる神です。この男の偽証は、まるで主イエスがエルサレム神殿の破壊者であるかのごとくに偽りを語っているのです。案の定、「この場合も、彼らの証言は食い違っ」(マルコによる福音書14章59節)ておりました。

偽証に重なる偽証、それは、この法廷に仕える者たちが、「神の御前に真実を語る」という本来の適正な司法におけるなすべき役割から離れていたことを物語ります。十戒の「偽証するなかれ」との戒めの前に、証言者たちは、主イエスへの嫉妬・企み・怒りにとらわれ、遂には自分たちこそ法廷の主であると言わんばかりの行動に出ます。彼らの思いを代表するかのよう、しびれを切らした大祭司は、法廷の中心へと進みます。そして、主イエスに問いかけます。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」(同14章60節)けれども、主イエスは黙しておられます。大祭司が直接イエスに「あなたは誰か」と問いかけるまでは。なぜ沈黙なされたのでしょうか。主が証言しなくても、彼らの偽証が食い違い、反論する必要がなかったからでしょうか。十字架が父のみ心の救いのご計画であると知るから、父への従順の故に、静まっておられたのでしょうか。

黙するキリストの前に、大祭司は尋ねました。「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(14章61節)この言葉は、直訳すると、「あなたは祝福されるべき方の子、キリストなのか」とも言えます。

主イエスご自身は、唯一、この法廷で、真実を語られておられます。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」

(62節)

大祭司は、衣を引き裂いて怒り、これを冒瀆の発言と判断し、最高法院一同は、主イエスを死刑とすることを決議しました。

ここで、イエス様はご自分がメシア・キリストであり、神の御子であられることを答えます。また、十字架において去り、復活して昇天した後、ご自分が再び来られる時、第二の到来の時、再臨の時のことを語ります。人々の神への敵意が募り極限に達しつつあるこの法廷で、イエス様は、これから起こる全てのことを見据え、且つ神の自由な・言い尽くせない人間への愛の証言を語られました。そうです、イエス様は「福音」を語られたのです。これこそ、偽りならざる神の真実な証しです。教会はこの証しを受け継ぎ、これを伝えることを任されています。

本日の最後の場面で、人々は、イエス様に唾を吐きかけたり、あるものは、目隠しをして殴り、「言い当ててみろ」(マルコによる福音書14章65節)と言いました。この「言い当ててみろ」は元のギリシャ語で直訳すれば「預言してみろ(プロフェーテューソン 2人称命令・単数)」です。実は主イエスがこの法廷でなさっていた事は、まさに十字架の赦し、復活の命と、主イエスが再び来られる時の再臨の預言でありました。イエス様は、ひたすら真っ直ぐに真実な証しをなさっていたのです。それも、わたしたちを言葉と行いと全てを持って、愛してくださる仕方で、証をなさいました。主イエスは、わたしたちを愛し抜く強い愛による証しをもたらしてくださいました。コロサイの信徒への手紙2章13節以下には次のような言葉がありました。

「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、14規則によってわたしたちを訴えて不利に陥っていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」(コロサイの信徒への手紙2章13b1~14節)

これから主イエスが向かわれる十字架は、わたしたちの罪を取り除いてくださるための道行きです。また私たち自身の十字架も、主が担ってくださっている道です。救い主の十字架を覚え、見つめながら悔い改め、神の深い憐れみと赦しへの感謝に生きましょう。私たちもキリストの真実を証しましょう。それは、既に勝利している光の証です。

祈りましょう。天の父なる神様。様々な偽りの言葉が行き交う最高法院の裁判で、主イエスは救いのご計画の十字架への道を進んでくださいました。主は、真実な証しを語られました。神の法廷の御前に、わたしたちをの罪を赦し、恵みによって義としていただく御救いに感謝いたします。わたしたちも、主イエス・キリストのまことを証しする器としてお用い下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

讚美歌 495番 イエスよ、この身を ゆかせたまえ

献金 頌栄 544番

祝 禱 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。

アーメン